

これからの

特集 指導

— 移行期に意識すること

今年度から移行期に入り、新しい学習指導要領を意識した指導が求められてきます。本特集では、これからの指導で大切なこと、意識しなければいけないことを考えてみました。研究に取り組まれた青南小学校の

奥水校長先生のインタビューと、現行教材を使った実践をご紹介します。

国語科を通して他教科を学ぶ

東京都港区立青南小学校（港区教育委員会の研究奨励校）では、「全教科で育てる『言葉の力』」というテーマで研究を重ねています。そこで、奥水先生に研究の中で感じられたことを交えて、お話しいただきました。

— 今年度から移行期に入ります。これからの指導で大切なことは何でしょう。

奥水 国語科がすべての教科のベースになる、国語科を通して他教科を学んでいく、ということ、教師がしっかり意識

識することで、子どもは「あつ、そうか。国語科で勉強したことって、こうやって使えるんだ」と思うことができ、国語に対する学習意欲が増すのではないかと思います。

— 今、おっしゃったことを、教科書教材を例に、お話しいただけますか。

奥水 「どうぶつの赤ちゃん」（一下）では、「ライオンの赤ちゃんは、生まれたときは、子ねごうらいの大きさです。」と、赤ちゃんの大きさを、「子ねごうらい」と具体物に置き換えて表現しています。なので、子どもに「子ねごを抱っこするとき、どんな風にする？」と一言で、動作化させる。そうすると、子どもは、実際に子ねごを抱くようなしぐさをして「ライオンの赤ちゃんってこんなに小さいんだ」って実感することができま

することですね。

— 今までの教科教育というのは、どちらかというと「この単元を教えました」という履修型だった。でも、これからは習得型でないといけないと思うんです。

例えば、「『ごんぎつね』を教えました」と言うけれど、「それで何が身に付いたんですか」と聞かれると、答えに迷うところがあった。習得というのは、身に付いたかどうか問われるんです。その部分の取り組みが今までは弱かったように思います。

— 国語科を通して他教科を学ぶという

— 国語科を通して他教科を学ぶという

— 国語科を通して他教科を学ぶという

自分の指導を見直す チャンスととらえる

— 青南小学校で、教室に掲示されている

奥水かおり
港区立青南小学校校長。
23年間の教員生活の後、
1996年、港区教育委員会
指導主事。2001年、東京
都教育相談センター統括指
導主事。2004年東京都教
育庁指導部主任指導主事。
2006年より現職。



●これからの指導

—移行期に意識すること

1

ポイント
「繰り返し」が
習熟と定着の
近道

新

新しい学習指導要領では、日常生活で生きて働く言葉を身に付けることがコンセプトの一つとして掲げられている。使える言語として身に付けるには、とにかく繰り返し使うことが習熟と定着の近道であることはわかっているのだが、それを子どもたちにどう効果的に、主体的に、生き生きと学ばせるかで、指導者はあの手この手を考えるのだ。その点で、「大きなかぶ」の教材を劇化することは、非常に効果的であると思う。

このお話自体、場面ごとに登場人物が一人ずつ増えていき、同じパターンが繰り返される。「かぶが大きくなった」(原因)、だから「ぬけない」(結果)。「ぬけないから」(理由)、「手伝ってほしい」(思

の下、大人に指導されながらボールゲームなどの技術を身に付ける。

新しい学習指導要領では、想像を広げながら読む能力を身に付けるよう、新たに明記された。想像力の欠如からおこる昨今の痛ましい事件を見れば、国語科としていかに想像力を身に付けさせるかということは、大きな責任問題である。

そこでもう一度、このごっこ遊びの力に目を向けたい。劇を作り上げる過程は、まさにこのごっこ遊びが原点となっている。ある役になる。子どもたちは実にスムーズに役になりきるのだが、それと同時に、物語の進行を客観的に見る目ももっている。役になりきってセリフを言っていたかと思うと、次の瞬間には、「じゃあ、ねこが、なかなか見つからなかったことにしよう」と意見を述べる。

上手に想像することができない子には、教師が相手役になり、話しかけてセリフを引き出したり、同じ役になったつもりで、「おじいさんと呼ばれたよ。何て返事をしようか」などの助言をしたりして、物語の世界に入る足がかりを作っていく必要がある。また、劇化する際には、常に本文に立ち返るようアドバイスすると、いちいち子どもたちの考えたス

劇化で生きた言葉を身に付ける

「大きなかぶ」(一上)

新しい指導を考へる会

い。この単純な繰り返しのおもしろさが子どもたちの心をとらえる。役になりきって何度もセリフを声に出すうちに、場面をつなげるためには、一つの役のセリフの中でどんな要素を話さなければならぬのか、自然と認識することができる。

また、教科書を三十回音読しなさいと言われたらいやになってしまっただろうが、劇の練習ではそんなことはない。授業の始まりに教科書を読むことは、楽しい劇活動を始めるウォーミングアップであり、練習の途中でグループの友達と読む教科書は、話の流れを確認する(つまり、自分の意見が聞き入れられるかどうかの)真剣な振り返りである。

子どもたちに繰り返し、主体的に活動させるためには、もちろん台本など必要ない。登場人物の行動を追うには、教科書に立ち返るのが最良だ。あとはアドリブでセリフをつなげていく。そのほうが、その都度セリフを吟味するので頭を使う。また学習の始めにたっぷり時間をとり、

トリーを訂正しなくても登場人物の行動を追ったり、物語の展開をなぞるくせがつく。今後の学習活動にもその力は生きていくだろう。

3

ポイント
劇化を通して
話し合う力を
付ける

新

新しい学習指導要領の目標に、「話題に沿って話し合う能力」と明記された。ここで、私が以前に「大きなかぶ」で劇活動したときの子どもたちの様子を紹介したい。

話し合いには、初め、子どもたちの言語能力と日頃の力関係が見事に反映された。あるグループは、日常生活の中で子どもたちの中心となり、遊びをとりしきる子が、「きみは、まご役、ここで、『どうしたのおばあさん』と言いながら出てきて」など、劇の流れからセリフに至るまで、次々と指示を出す。言われた子は、納得しているのかいないのか、慥然とした表情で動き出す。なかなかセリフを言わないと、「まじめにやっ」となる。ま

始めは役を次々と交代し、色々なセリフを言うことが、定着の近道だろう。

2

ポイント
劇化で
想像力を広げて
読む力を付ける

昔

は、毎日のようにさまざまなごっこ遊びをしたものだ。女の子同士ならおままごと、男の子と一緒に正義のヒーローもの。ごっこ遊びは、何もない状態からすべてを想像で作りに上げていく。場面設定、登場人物、人物描写、小道具や大道具の見立て。話は、話し合いながらころころ変わっていく。

ところが、今の子どもたちがごっこ遊びをする姿をあまり見かけない。葉っぱや小枝を見立てなくても立派なキッチンセットが用意され、大人が決めたルール

た、あるグループは、みなやりたい役を譲らず、泣き出す子が出る始末。教師としては、ハラハラのスタートである。

しかし、ここでひとふんばり。「あなたなぜこの役をやりたいの」「二人が同じ役をやりたい。何かいい方法はあるかな」「あなたはこのセリフでいいと思う」など、根気よく話し合いのいろはを伝えていくと、子どもたちは少しずつ自分たちだけで話し合いを進める自信をもつようになり、活気が出てくる。ここまできると、子どもたち自身、話し合うという行為が楽しくなってくる。自分の意見が認められる嬉しさ、相手の意見に納得する連帯感、話し合いを成り立たせるには話題に沿って考える必要があるという気付き。納得して話し合うと、劇そのものが生き生きしてくる。

話し合う能力とは、一口に言語能力だけでは計れない。お互いの気持ちを推し測って発言の仕方を考慮したり、相手の意見をふまえて自分の意見を言ったりできなくてはならない。何度も話し合いの経験を積み、話し合ったことでよい結果が生まれたという満足感を多く体験することで、さらに話し合いへの意欲が高まり、力として定着していくだろう。

1

言語活動を通して、内容を確実に読み取る

新

新しい学習指導要領では、国語科のみならず各教科等においても言語活動の充実が謳われている。ここで気を付けるべきは、読み取りと活動とが分断されないようにすることである。

本教材で考えられる言語活動に、「リーフレット作り(※)」がある。「言語活動を通す」ということは、「リーフレットを作りながら読み取っていく」ということである。初めに学級全体で読み取りをすべて行った後に、リーフレットを作るというのでは意味がない。子どもの側からすれば楽しくリーフレットを作っているのだが、実は、それが文章を読み取っていることになっている、そんな言語活動を目指したい。

「ありの行列」(三上) 新しい指導を考える会

に付けていくことにつながるのである。

2

語を語彙として意識させることで、語彙力を付ける

新

新しい学習指導要領では、すべての教科・領域等を通して、基礎的・基本的な知識・技能の習得が強調されている。国語科においては、その一つに「語彙力」が挙げられるだろう。

ここで「語彙」とは、何らかの観点によってグルーピングされた言葉の集合体であることを指す。単独の語を指しているのではないのである。本教材では、説明的文章を読むための語彙として、接続語を取り上げてみよう。

本教材は、短い文章の中に多くの接続語が登場する。それらを「接続語」とい

また、新しい言葉を獲得した際に、グルーピングの中に語を位置づけるような学び方は、語彙を質的にも量的にも豊かにしていくことが期待できる。

ぜひとも子どもたちに、語彙の意識をもたせていきたい。

3

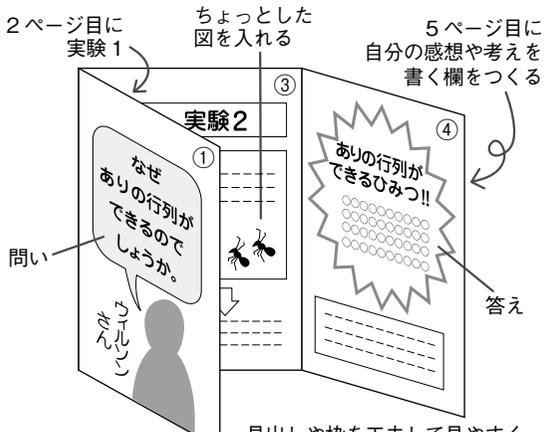
文章を読んでまとめたものを交流する場を設定する

新

新しい学習指導要領の特徴の一つに、学習過程として「交流」が位置づけられた点が挙げられる。互いの感じ方や考え方の違いに気付き、自分の考えを深めていくものである。

本教材では学習のまとめとして、各自の作ったリーフレットを互いに読み合う場を設定するとよいだろう。リーフレットの中には、文章を読むことでもった自分の感想や考えたことを、記述するスペースを設けておきたい。その際は、文章の内容を要約した部分と自分の考えとが混同しないように、きちんと書き分けることも指導する必要がある。文章を読んで自分

(※)リーフレットの例
八つ切り画用紙を三つ折りにして作る。



- ・見出しや枠を工夫して見やすく。
- ・文は短く。(要約意識)

特集

これからの指導 移行期に意識すること

●これからの指導

―移行期に意識すること―

1

ポイント 言語活動を充実させた 単元を構想する

新

新しい学習指導要領解説国語編の「国語科改訂の要点」には、「学習過程の明確化」と「言語活動の充実」が挙げられている。この考えを具現化する単元を提案したい。

本単元では、賢治の生き方や考えなど、作品の背景を考えながら読む面白さを体験させたいと考えた。そのため、一次で野口雨情の「しゃぼん玉」を読解させたい。この詞は、二歳で亡くなった娘の魂をしゃぼん玉にたとえている。「うまれてすぐに、こわれて消えた。」は、まさに娘をたとえていると考えられる。この学習をすることで、作品の背景を知って読むことの面白さを感じること

「やまなし」で宮沢賢治の世界へ ―賢治の生き方を通して作品を読もう―

一次(導入)

単元で行う言語活動の決定

- ① 作品の背景を知ること、読みが深まったり広がったりすることを理解する活動
・「しゃぼん玉」(野口雨情作)の読解
- ② 賢治や賢治の作品に対する関心を高める活動
・賢治について知っていることや読んだ経験のある作品名を挙げる。
- ③ 学習課題と学習計画を立てる活動

二次(展開) 教材を使用した学習

- ① 「やまなし」の読解活動(ワークシート活用)
・ 本単元での読み方のモデルとなる。
・ 読解と並行して「イーハトーヴの夢」賢治の伝記や文庫、インターネットなどで背景や作品に関する情報も集める。(多読)
- ② 賢治の他の童話の読書活動
・ 「やまなし」と同様、情報収集をしながら読み進める。(多読)

三次(終末) 言語(表現)活動

- ① 作品に見える賢治の生き方や考え方を発表して交流する言語活動
・ 個々が発表する。
・ 発表の後、共感したことなどを交流する。

作品の背景を考えながら読む

「やまなし」(六下)

新しい指導を考える会

ができるであろう。また、この学習経験をもとに学習課題が生まれ、二次で「やまなし」を通して学習し、三次でまとまった言語活動として表現される。学習課題は左上の図のようにした。

2

ポイント 作品全体が 見渡せるシートを 活用して読解する

新

新しい学習指導要領「C読むこと」の指導事項エ「優れた叙述について自分の考えをまとめること」や、言語活動例イ「自分の課題を解決するために、意見を述べた文章や解説の文章などを利用すること」の具体化である。

短時間で「やまなし」を読み終えたい。「やまなし」の特色は、言葉遣いの面白さや描写の美しさ、五月と十二月の違い

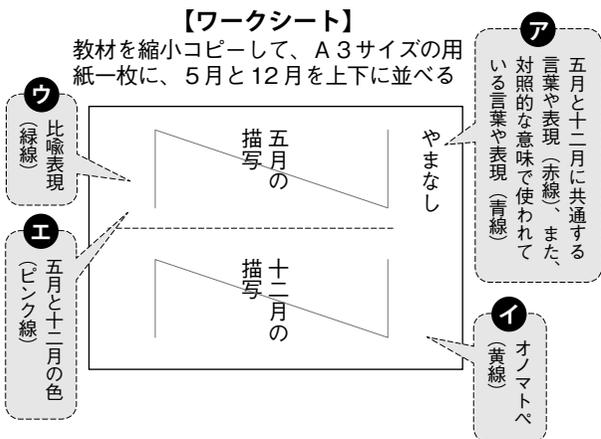
3

ポイント 本を選んで比べて 読む力を付ける ために多読する

新

新しい学習指導要領「C読むこと」の指導事項カ「目的に応じて、複数の本や文章などを選んで比べて読むこと」を具体化するために、本単元では、二つの目的で多読する。一つ目は、賢治に関する文や文章、年表などを読むことである。二つ目は、賢治の他の作品(童話)を複数読むことである。

賢治の生き方や考え方を手がかりとして、教科書にある資料「イーハトーヴの夢」、「イーハトーブロマン 宮沢賢治の世界」(くもん出版)をはじめ、伝



などである。そこで、右のようなワークシートを有効に活用し、作品全体を見通したり、五月と十二月を対比したりして読む。次のアからエのような観点を挙げ、各自がそれらに着目して、その意味や効果を考え、ワークシートに自分の考えなどを書き込むのである。このように

記などを活用することができる。その他、インターネットでも賢治のさまざまなことを調べることができる。必要に応じて、コピーをして全員に配布し、共通理解を図る。

賢治の他の作品については、全集や絵本がさまざまな出版社から出ているため、学年・学級で一括して借りて、自由に読めるようにしておきたい。自習時間、宿題などで一人一冊手にするよう、一学級の児童数分を確保できるのが理想である。このときの読みは、「やまなし」の学習を生かしての読みであり、複数の作品を次のようにして読む。

- ▼ 作品そのものの面白さを読む
 - ・ 表現の特徴(オノマトペ・比喩・対比など)
 - ・ 内容の面白さ(主人公の性格、ストーリー展開など)
 - ・ 「やまなし」に通じるところ
- ▼ 賢治の生き方や考え方、時代背景を考えながら読む
 - ・ 賢治の人物像が表れている言葉・文・場面など

最後には、一つの作品を深く掘り下げたり、複数比べてたりしてまとめる。この活動が三次の言語活動につながる。